

バヌアツ ビジネス事情—その2

白鳥貞夫 (SV H16年秋)

小生の前歴は電気メーカー社員で、時折門前の小僧的発言をするので「技術系」と誤解されることもあるが、高1で数学から落ちこぼれた数学オンチの事務屋である。算数能力はバヌ人とドッコイと自認しているが、定年までそれ程恥もかかずに過ごしたので、ビジネスの数学能力は小学校の四則演算で十分と断言して憚らない。

妙な書き出しになったが、人口20万のバヌアツの経済規模は小さい。国家予算の80億円は、日本では中企業の年商に相当し、しっかり社長ならば隅から隅まで目が通る。しかし小さいながら「国」となるとその実像は掴み難い。小生が着任早々にジタバタした姿は前号でご紹介したが、その後も殆ど前進していない。

この国には所得税制がなく、従ってビジネスの実態を公的に把握するシステムが存在しない。国全体の経済動向については、バヌアツ中央銀行「Reserve Bank of Vanuatu」が四半期毎に出す「Quarterly Economic Review」がある。バヌアツ離れした60ページを越える立派な定期刊行物だが、データのタイトルとり違えなどのご愛嬌もある。<http://www.rbv.gov.vu/>に公開されているので、バヌアツ経済に関心のある方は覗いて見てほしい。

このレポートには「産業統計」も含まれるが、数字に表れる経済活動の大部分は在留外国人によるもので、早い話、オーストラリア人やフランス人の世界でお金がグルグル回っているだけである。中国系やベトナム系バヌアツ人が経営する中規模のビジネスも少なくないが、彼等も利益を本国に送金するのが習慣で、バヌアツ経済への再投資は期待できない。我々は「バヌアツの、バヌアツ人による、バヌアツの為のビジネス」育成を目指すのだが、現状では、その大多数がオバちゃんストアや、個人タクシー、ナカマル経営であることは、前号で述べたとおりである。

ちなみに、統計局のサイト <http://www.vanuatustatistics.gov.vu/> もあるが、データが古く分類も不明なものが多い。バヌアツの国情全般に関しては、日本外務省のサイトも充実しているが、米国中央情報局(CIA)のサイト (<http://www.odci.gov/cia/publications/factbook/geos/nh.html>) はさすがに情報量が多く、且つ頻繁に更新している。

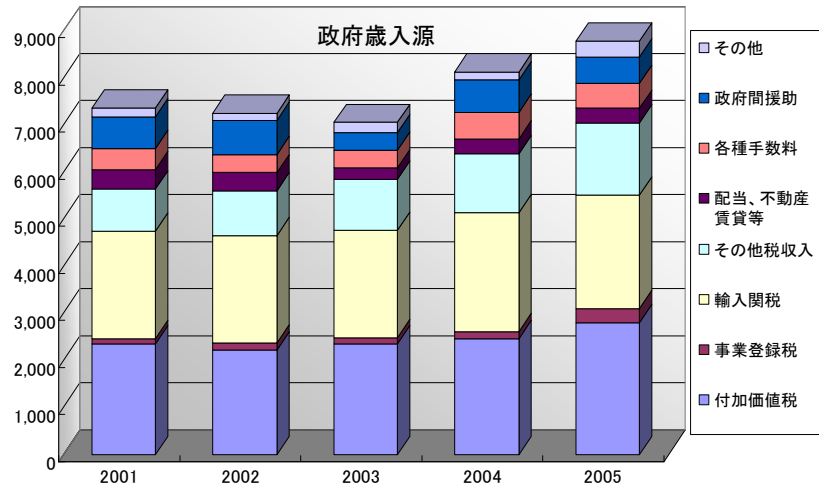
今回は、「Quarterly Economic Review」2005年12月版のデータを中心に、バヌアツの経済事情の一端を覗いてみたい。なお、小生は財政や国際金融にはシロウトなので、誤解・曲解の段はお許しいただきたい。

1. 政府の歳入

先進国の国家財政の大半は企業や個人が納める所得税でまかなわれる。(日本の場合、国債という借金で補填される部分が多いことは、将来借金を返す立場の若い諸君にご承知おき願いたい)。所得税を国の財政の柱とするには、巨額の利益を上げる企業や高い給料を取るサラリーマンの存在が不可欠で、加えて、徴税システムとしての税務署や税吏、税金を適正に算定する税理士や会計士も必要である。

所得税制のない国では、もっと手軽に税金を取り立てる仕組みが要る。バヌアツの場合、国家財政の6割を輸入関税と付加価値税（消費税）に依存している。生活必需品を輸入に頼るバヌアツの諸物価が高いのもこれで理解できるだろう。「その他税収入」が2割を占めるが、この大半は「Finance Centre」と称

するタックスヘブンスシステムからの収入である。これは、外国人が財テクの目的でバヌアツに設立した名義的法人が払う、一種の「ショバ代」と考えればよいが、脱税や不正取引隠蔽（Money Laundering）に利用されることも多く、あまり自慢できる制度とは言えない。その他に、政府

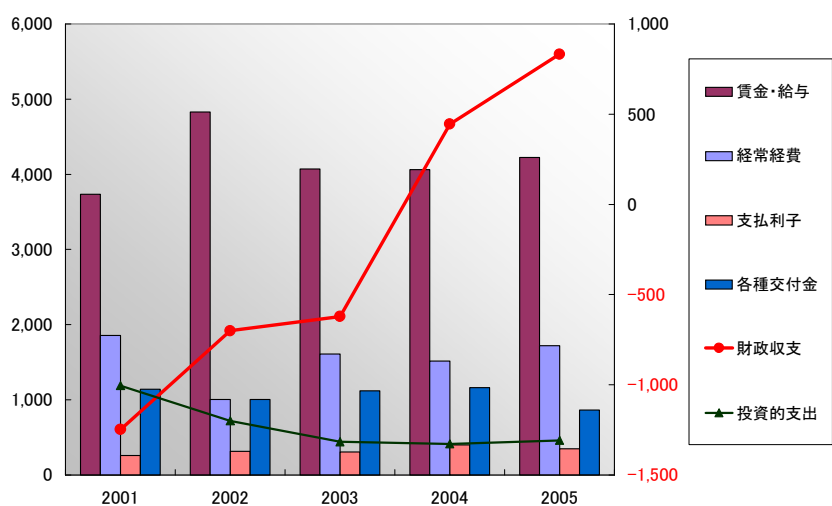


間援助が国家財政の約6%を支えているが、技術協力や現物供与の援助はこれに含まれない。

2004年以降、消費拡大と Finance Centre の増収に支えられ、税収は順調に伸びている。最近ではバヌアツ人も輸入食品を多く食べるし、自動車も乗り回すようになったので、関税や付加価値税の負担も増えている筈だが、大雑把に見て、国家財政の過半は、何らかのかたちで外国人（我々も含む）が支えていると考えて良いだろう。発展途上国の現状としては仕方がないが、自分の政府は自力で支えて初めて一人前で、バヌアツも早くそうなって欲しいものである。

2. 財政支出

次のグラフは最近5年間の財政歳出と収支残の動向を示したものである。2004年以降は増収に加えて緊縮の効果もあったようで、収支が黒字に転じた。しかし、支出の大部分は公務員給与等の定常的支出で、投資的支出は年間5億円にも満たない。何かにつけて先立つものが無い、

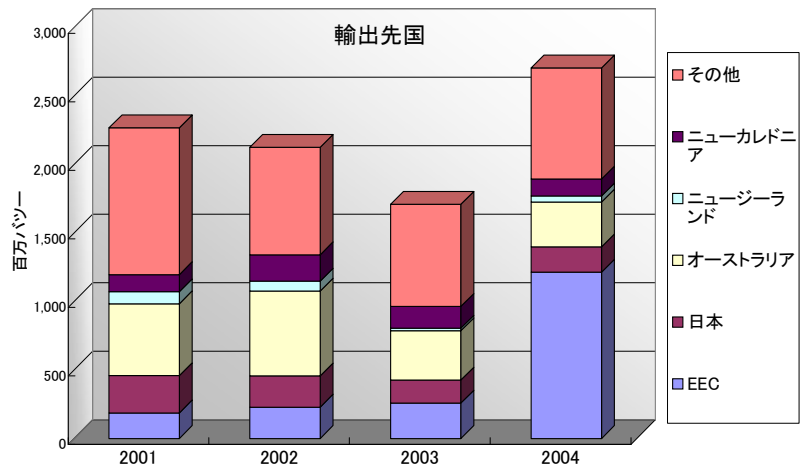


という事情が、このグラフからもよく分かる。かく言うものの、公共投資を野放図に膨張させて借金まみれに陥った某経済大国などに比べると、債務がここ数年増えていないバヌアツの国家財政には、貧しいなりに健全性を保とうとする努力が見えるようにも思われる。

3. 輸出入

日本は輸出超過でドルの溜め過ぎと批判されるが、財テクで国際間を流動する投機的資金の流れが、貿易収支の数倍にも達する時代である。これが「お金の意思」で世の中が動く自由主義経済の究極の姿らしいが、メーカー育ちの小生は、投機的財テクには不健全な匂いを感じており、昨今の一連の経済事件などを見ても、やはりビジネスは「実業」であるべきとの感を強くしている。

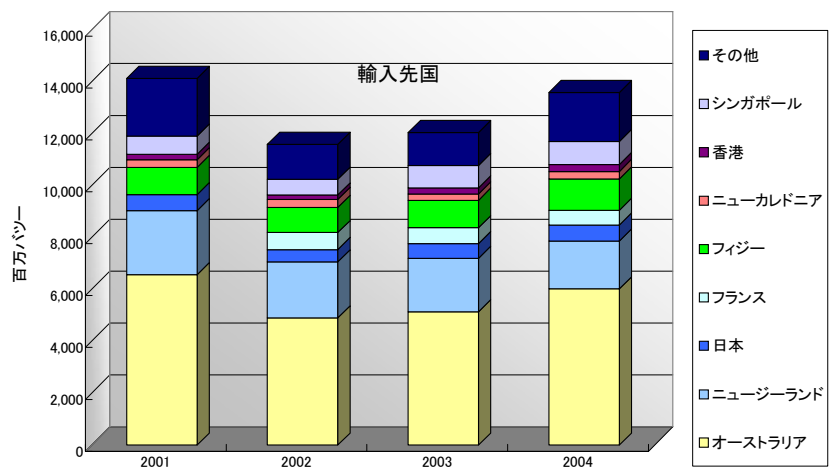
バヌアツの輸出額は年間 20 億バツ前後でしかない。最大の輸出産業は現在もヤシ油だが、買い叩かれて国際価格は低迷を続けており、石油が枯渇して代用燃料の需要でも本格化しない限り、大きく伸びることは期待できない。牛肉、魚介類、ココア、コーヒーの輸出は何れも零細規模だし、カバも禁輸品目に指定されたりして不安定である。バヌアツには輸出



できるような天然資源は皆無だし、加工貿易を起こそうにも立地条件が悪すぎ、熟練労働の基盤も無い。バヌアツの輸出振興は、いわばナイナイ尽くしなのだが、ご本人の危機感も無さそうだ。

輸出には「市場開拓」の努力が不可欠だが、バヌアツ人のビジネス感覚は、「商品を並べておけば、その内に誰か買ってくれるだろう」という、露天のオバちゃんショップのレベルから脱していないようだ。商工会議所ではマーケティング講座もやっているが、この国には「競争の中での差別化」という環境が無いから、「市場開拓」もピンと来ない。過当競争に疲れた我々から見ると羨ましくもあるが、彼等にビジネス研修を提供する立場としては、トカダンスの輪の中で「白鳥の湖」のソロを踊らされているような気分になる。

一方、輸入は輸出額の 6 倍の 120 億バツにも達している。食料輸入・消費拡大や経済活動の活発化に伴って、今後も増大の一途をたどるだろうが、そうなれば、輸出の伸びが望めない中で、貿易収支の年間赤字幅が現在の 100 億バツから更に拡大することが避けられないだろう。その穴はサービス産業



の拡大で埋めるしかないが、その殆どを外国人に支配されている現状を何とか打開しないと、国

として豊かになる道は拓けない。

4、バヌアツ経済自立の条件

小生は政治家や財政専門家ではないので、見識ある意見など持ち合わせないが、バヌアツでのビジネスの利益がバヌアツに再投資されなければ、国が豊かにならないことは確かである。日本をはじめとする援助国は、バヌアツの経済自立のための地道な援助を続けているが、夫々の国の思惑の中で、散発的なばら撒きになり勝ちだし、バヌアツ側も、組織的に「受けて立つ」体勢が明確とは言えない。経済自立の第一の要件は、政府が「先立つもの」を自らで確保し、援助と噛み合わせることによって、政策的に産業育成を進めることではないかと考える。

先に述べたように、バヌアツ政府を支える財源は、敢えて悪口を言うならば、物価を押し上げて消費意欲を削ぐ付加価値税、国内産業の競争力を阻害する関税、外国人に資産隠しや Money Laundering で悪用されやすいタックスヘブン収入の三本柱である。ここには、ビジネスを盛んにして、その収益の一部を税金として吸い上げて国の発展に資する、という近代資本主義国家の基本が見あたらないのである。

人口 20 万の経済規模は小さく、このような条件下で企業や勤労者から所得税を徴収するシステムを作っても、当面は効率が悪いかもしれない。しかし、バヌアツが経済自立を目指す上で、現在の税システムには阻害要因が多いことも確かである。現在でも、ビジネスから付加価値税を吸い上げるシステムはあるのだから、所得税もやって出来ない筈はない。勤労者に年金を拠出させる仕組みを利用すれば、個人所得税の天引き徴収も可能だろう。

経済自立を進める上で、もう一つ要件がある。それは、バヌアツ人がビジネスの真の意味を理解し、国の発展のために健全な環境を築いてゆくことである。ビジネスは「金儲け」ゆえ、自然の流れに任せれば、「金儲けの為の金儲け」に向かうのが資本の論理であり、それが汚職の源になるのは、どの国でも同じである。「先進国」では、過去の様々な苦い経験を通して、ビジネスを法律で縛ることによって、「資本の論理」と「健全な人間社会」とのバランスを保とうとしてきた。しかし、このバランスは常に「お金」の側に傾き勝ちだし、歴史上、宗教が「お金」の暴走を止めた例も聞かない。

貨幣経済に免疫の少ないバヌアツ人には、「お金」の毒も早く回りかねない。天真爛漫なバヌアツ人が目の色を変えて金儲けに走るのは哀しいし、一部のエリートが私利私欲に走り、同じ国民を食い物にするような国になるのも見たくない。

ビジネスの相手は「人間」(お客様)であって、お金は道具にすぎない。相手が人間である以上、ビジネスが提供するものは「お客様にとっての価値」である。その価値を高めるために努力を継続することが即ちビジネスに成功につながる、という論理と方法論を確立させたのが、1970 年代の「日本流品質管理」である。80 年代後半になって米国やヨーロッパがこれに注目し、彼等流にモデファイしたものが、経営品質向上運動や ISO-9001:2000 経営品質国際標準規格である。日本流品質管理や ISO-9001:2000 も、「いかに多く儲けるか」の手法であることに違いはないが、

投機的財テクでは「お金」の増殖が自己目的になっているのに対し、「実業」のビジネスには、お客様の為に「質」の高い商品やサービスを提供しよう、その為に従業員が一丸となって努力しよう、という「人間」の情念が根底にある点が根本的に異なる。

「オバちゃんショップ」から ISO-9001:2000 までの距離は、遠いようで案外近いのではないかと小生は思っている。バヌアツに根強く残る原始共同体の論理は、共同体の意思で個人的な欲望を縛るものである。この伝統は貨幣経済の進展と共に崩れ去る運命にあるのだが、バヌアツ人に「お金」の毒が回りきらない内に、何とか「人類」という共同体の価値観へとつなぎ、「質」を迫及するビジネス倫理へと跳躍してもらえないものだろうか、というのが、小生がこの1年間あまり「品質管理」にこだわり続けてきた理由である。まだ出発点にも立たない内に小生の任期は終わるが、この国がこれからどんな発展をするのか、今後も関心を持ち続けたい。